

## 倭訓栞の長大項目について

# Inquiry on Terms with Significantly Long Descriptions in Wakun No Shiori

平 井 吾 門\*

Amon HIRAI\*

### 要旨

倭訓栞の成立過程を示す3本（自筆本・清逸本・整版本）には、それぞれ平均的な語積より遥かに分量の多い項目がある。本稿では、それらを倭訓栞の「長大項目」と名付けて抽出し、どのような性格を持つものであるのか分析した。従来この長大項目に関する考察は行われてこなかったが、編者・谷川土清の意図を探るといふ点を考えれば無視することのできない問題である。

本調査ではまず、3本の平均的な語積分量を算出することで長大項目を規定し、各本における長大項目の特徴を述べた。さらに、諸本間の比較を通じて倭訓栞の成立過程における編纂態度の変化について論じた。

その結果、倭訓栞は神道や上代文献に関する語彙集のような性格のものから、より一般的な語彙を追求する辞書へと編纂態度を変化させていき、最終的に「商品」として成形するにあたってさらにその度合いを明確にしていった、ということが明らかとなった。

キーワード：倭訓栞、谷川土清、国語辞書史

### 1. はじめに

伊勢の国学者・谷川土清（1709～1776）によって編纂が始められた倭訓栞は、その子孫を中心に110年かけて編纂・刊行が続けられ、前・中・後編合わせてのべ約2万語を収録した全93巻の国語辞書である。雅言集覧・俚言集覧とともに、近世の3大国語辞書として知られ、その最も早いものとして国語辞書史上に大きな価値を有している。

比較的近年に刊行された初学者向けの辞書解説書である「図説 日本の辞書」<sup>1</sup>を見ると、倭訓栞について「本格的な五十音順配列の国語辞書として最初のもの」「第2音節までを五十音順に配列し、どのような漢字表記に対応するかを示し、時に意味区分を行いながら、語義解説を施し、類義語や語源にも言及する。豊富な文例を示すことによってそれらを裏付ける」と概略している。このような理解が、倭訓栞に関する学界及び世間一般の共通認識であると考えられるが、細かな点を考えると問題も多い。「図説 日本の辞書」では、明治期に成立した言海についても「五十音順で並

べられた初の本格的な国語辞典」であると述べ、「本格的な国語辞書」というものがどのようなものであるのか、倭訓栞の何が新しいのか、といった点が明確ではない。

筆者は、倭訓栞の新しさに関して、「編纂が進み、語義の記述方法が確立されていく過程に、近現代の国語辞書へと繋がる辞書形態の萌芽が見られる」ということを指摘し、その本源を究明しようと試みてきた<sup>2</sup>。本稿では、倭訓栞の中に見られる長大項目（明らかに他よりも語積に分量を割いている項目）に着目する<sup>3</sup>。倭訓栞の起稿当初から分量が長大であった項目と、編纂が進む中で長大となっていた項目の特徴を比較して論じ、平均的な語積量の項目と比べて長大項目の語積に積極的に取り込まれている要素がどのようなものであるかを検証することで、倭訓栞の性格解明の一端としたい。

### 2. 問題の所在

長大項目を扱う前に、倭訓栞の諸本について各々特

\* 弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

徴を記す。倭訓栞は、谷川士清の手による自筆本、刊行直前の写本を子孫がさらに転写した清逸本、そして刊行された整版本の三種が一般に知られている<sup>4</sup>。

自筆本は、初期稿本に近いものであると目されており、全7冊で完結し、収録語彙数や語釈の分量も多くはない。後に増補された部分が2段階以上に分けて確認できることなどから、自筆本の中で通時的な分析も可能となる。

清逸本は、谷川士清の友人である文人・河北景楨が書写していた稿本を、士清の子孫である清逸が転写したものである。整版本では、刊行を前に書肆の要請を受けて項目・語釈に大幅な節略が為されたことが知られているが、それに対して清逸本は、節略を受ける直前の様子を示す本として近年注目されている。

谷川士清と本居宣長の間で交わされた書簡から、整版本で為された節略が不本意なものであったことが知られており、特に倭訓栞の成立過程の究明において清逸本の持つ意義は大きいと考えられる。なお、倭訓栞の研究を牽引される三澤薫生氏が清逸本を「景楨本の忠実な写し」と認めているものの、清逸本の扱いそのものについては研究がほとんど進んでいない現状において学界における統一見解に乏しく、今後更なる検証が必要である。特に、誤記と思しき箇所について、誰(士清、景楨、清逸)の誤写であるのかといったことが判じ難く、残存資料の少ない倭訓栞の研究において清逸本が重要資料であることは言を俟たないものの、谷川士清自筆本と同列に扱うことは憚られるものでもあることが注意される<sup>5</sup>。

整版本は、前述の通り刊行前に節略を受け、それによって元来統一された本であったものが前編・中編・後編に分割された状態で出版されている。士清没年の翌年から段階的に刊行が開始されるが、第1回目に刊行された前編の「そ」巻(巻13)までは、概ね士清の意思が反映されていると考えられる。なお、それ以降の巻には、編纂・刊行を継承した子孫や関係者の手が少なからず加えられていると見られる。

辞書史研究において、倭訓栞の後世への影響を考える際には完成品としての整版本を中心に考察する必要があり、倭訓栞の祖形や編纂過程を辿るには自筆本や清逸本を中心に据え、後人の手が入った部分を排除して論を組み立てねばならない。本稿では、谷川士清が編纂した倭訓栞の内実に向かうという研究の趣旨に基づき、後者を採用するものである。

以上のような倭訓栞の状況を踏まえた上で、長大項目について問題となる点を確認する。

まず、倭訓栞の各本では、項目によって語釈に割かれる紙幅の分量に大きな差が見られることが一見して指摘できる。大半の項目は、各本ともに一行から数行程度の語釈で示される一方、特に長いものになると一つの項目に対する語釈が数丁に及ぶこともある。

そして、自筆本では平均的な項目であったものが、清逸本では語釈の分量が大幅に増大して長大項目となる項目も少なくない。その背景には、「同音異義語を積極的に収めたため」ということも考えられるのではあるが、同音異義語が存在しない項目でも見られる現象であるため、全てをその理由で説明付けることは出来ない。そもそもどのような項目において語釈が長大になったのか、その在り様についてはこれまで議論の対象となつてこなかった。それ故、その研究意義自体についても依然として検討されていない状況にある。

また、清逸本から整版本への変化では、書肆の要請から節略が生じて多くの項目で重要な情報が割愛されているにも拘わらず、依然として長大な項目が残っているという現状があり、その理由もまた未解明である。

これらのことを総合的に考えて、倭訓栞が何を指して作られたものであり、その編纂態度はどのように変化していったのかということの一側面を明らかにするため、長大項目の内実を探ることが本稿の目的となる。

### 3. 先行研究及び研究方法

前述の通り、倭訓栞の長大項目そのものについて論じたものは管見の限り見られない。

なお、倭訓栞が自筆本から清逸本、清逸本から整版本へと編纂を進める中で、語釈にどのような増補・節略が行われてきたのかということについては、三澤薫生氏が一連の研究で調査されている。倭訓栞研究は、その歴史自体は長いものの、昭和以前においては自筆本や清逸本は扱い得ず、調査資料の限界などから停滞していた感がある。その反動で現在進行的に研究が大きく進展している分野ではあるが、三澤氏の研究成果も現行の辞書や概説書の類にはほとんど反映されていないため、長大項目の扱いも含めて今後の学界の動向を注視したい。

本研究の方法としては、次のように行うものである。

- ① 士清の意思を探るため、自筆本・清逸本・整版本の各本について、「あ～そ」部までの語釈

の分量を計測する。その際、趨勢を見極めるため、計測は文字数単位ではなく行単位で行う。

- ② 各本の中で語釈の分量の標準偏差を求め、長大項目の基準を算出することで、長大項目を規定する。
- ③ 各本の長大項目について、位相や語義の面から特徴を記述する。
- ④ ①の範囲で全ての本に共通する項目を抜き出し、編纂過程における長大項目の変化を記述する。

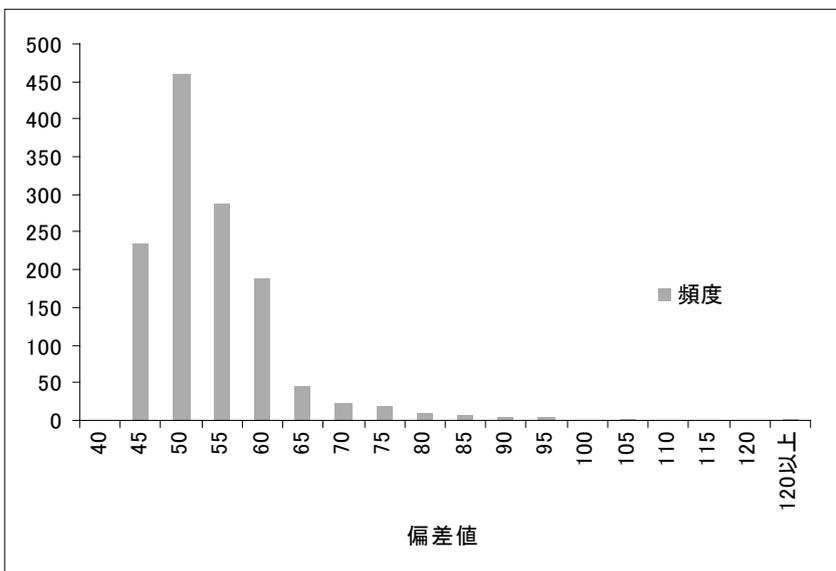
#### 4. 各本における長大項目の規定

自筆本・清逸本・整版本における長大項目を各々算出する。字詰や体裁の異なる3本を比較するため、各々の項目における行数に対する標準偏差を求め、各項目の行数の偏差値を求めて比較することを考えるものである。

なお、倭訓栞は「第2音節までを50音順に排列する」という原則があり、50音順に慣れぬ人の為の指標として、「いあ」のようにその語形に所属する語が無い場合であっても、語形だけを表示した所謂空見出しが設定されている。未だ排列が整っていない自筆本にはそのような類の空見出しは存在しないが、清逸本と整版本ではそれぞれ54個、87個の空見出しが存在する。この空見出しに関しては、便宜上「0行」として計測した。

##### 4-1 自筆本

【図1】



自筆本では、主に3分割された用箋を用いており、罫線内部を用いた「罫線部」(片面12行)、左右に増補された「余白部」、そして上段余白に記された「上段部」に大別される。本稿では、増補部分である余白部及び上段部については考察の対象から除外し、罫線部のみを分析する。これは、編纂当初における谷川士清の意向を探ることを重視するものである。また、雑多な書き込みによる増補部分を除外することで、分量の計測に正確を期すことも期待できる。

自筆本の罫線部では、全部で2884語(句)の項目を有し、その中で「あ～そ」部では1293語(句)の項目が掲げられている。自筆本における個々の語釈の体裁は、概ね「わくん 漢字表記・用典・用例」といった形で構成されており、1行に約20字入る罫線の行数で示せば、平均して1項目につき2.93行のごく簡潔な記述にとどまっている(なお、全巻を対象に調査しても、平均は2.81行となりほぼ変わらないことが分かる)。即ち、概算で示せば、各項目において語釈に要する平均的な文字数は60字弱程度ということになる。

この場合、「あ～そ」部の各項目の行数における標準偏差は2.066971となり、次の図表1を得る。

自筆本には、突出した長大項目というものは少ない。自筆本は片面が12行であり、「あ～お」部までを通して見ても、最も長い語釈が「そら」の19行である。ただ、平均値が3行未満であることを考えると、12行を超える(片面全てを費やすほどの)項目は直感的にも長大な項目であるということが意識される。これらのことを踏まえて、自筆本においては語釈の分量が12行を超えるもの、偏差値で表せば93を超えるもの

【表1】

偏差値	頻度	割合 (%)
40	1	0.0772797527
45	235	18.1607418856
50	460	35.5486862442
55	288	22.256568779
60	189	14.6058732612
65	47	3.6321483771
70	23	1.7774343122
75	18	1.3910355487
80	10	0.772797527
85	7	0.5409582689
90	4	0.3091190108
95	5	0.3863987635
100	1	0.0772797527
105	3	0.2318392581
110	0	0
115	0	0
120	1	0.0772797527
120以上	2	0.1545595054

を長大項目と規定することとする。

これは、自筆本における今回の調査対象の項目数に対して約1パーセントを占めるものである。清逸本及び整版本における長大項目の算出に関しても、これらの基準を踏襲するものである。

自筆本における長大項目は、以下の12項目である。なお、参考として、今回の調査対象外である「た」部以下の項目についても括弧を付して示した。

【19行】そら 【18行】せ 【17行】かはやしろ (【16行】はぎ) (【15行】たく・としみ) 【14行】え・こゝろば・さくさめ 【13行】すがる 【12行】あなゝひ・あわゆき・かげろひ・き・しをり (・とこよ・ひ・まめ)

#### 4-2 清逸本

清逸本には、界線なしの用箋(片面12行)が用いられている。「あ〜そ」部においては、9478語(句)の項目が掲げられており、自筆本から大幅に集録語彙数を増やしていることが分かる。なお、清逸本にも本文の周囲に小書き増補の類が大量に見られるが、ここでは成立過程の変化に着目するという目的から考察からは全て除外してある。

清逸本では1行につき約22字という字詰が採用されており、平均して1項目につき4.29行を用いた語釈が行われている。すなわち、平均的な語釈字数は、単純計算で95字程度ということになる<sup>6</sup>。

また、「あ〜そ」部の行数における標準偏差は5.058142となり、次の図表2を得る。

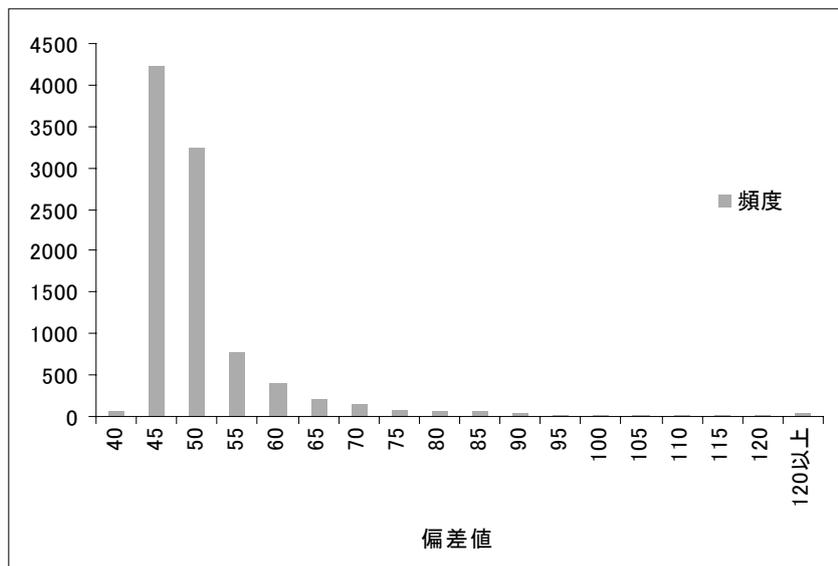
清逸本は、自筆本に比べて項目数が約7.3倍に増加しており、語釈の分量が長大な項目も全体的に増加している。清逸本の語釈において最長の117行を費やしている「あふぎ」は別格としても、語釈量が3ページ分にあたる36行を超えるものが39項目存在する。更には、語釈量が2ページ分にあたる24行を超えるものになると128項目に及ぶ。

これらを踏まえて、自筆本同様に項目数全体の上位1パーセントを長大項目であると規定することで、27行以上の語釈を含む項目を考察対象とする。

清逸本における長大項目は以下のとおりである。

【117行】あふぎ 【76行】きく 【74行】さくら 【70行】きつね 【63行】こひ 【55行】うし 【54行】うはぶみ 【52行】かひ 【51行】あすか・かも 【47行】かぶみ・かり・くま 【46行】さる 【45行】しほ 【44行】あやめ・いつきのみや 【43行】かはらう・かみ 【42行】を・かつら 【41行】せ 【40行】け・さば・すゞ 【39行】あの・あらし・こ 【38行】いぬ・かき・かりのつかひ・くし 【37行】あまつきつね・をの・すゞり 【36行】うめ・かば・しのぶ・す 【35行】あこぎ・からす・ごいし・ごりやう 【34行】え・くも・さけ 【33行】あふひ・あめ・うぐひす・えび・かな・かね 【32行】あへ・あま・かみなり・き・すまひ 【31行】あし・いも・かい・かはつ・かめ・くり 【30行】えぞ・か・から・こそ 【29行】いかづち・いしだま・かぢ・かのえさる・きみ・こゝろにもあられて・ごわう 【28行】あはび・いせ・いね・うま・えぼし・

【図2】



【表2】

偏差値	頻度	割合 (%)
40	54	0.5697404516
45	4228	44.6085672083
50	3250	34.2899345854
55	781	8.2401350496
60	406	4.2836041359
65	217	2.2895125554
70	156	1.6459168601
75	91	0.9601181684
80	59	0.6224941971
85	57	0.6013926989
90	36	0.3798269677
95	21	0.2215657312
100	29	0.305971724
105	19	0.200464233
110	11	0.1160582401
115	11	0.1160582401
120	13	0.1371597383
120以上	39	0.411479215

かみあげ・きり・さかき・さかづき・さす・さる  
 がく・すゞめ【27行】あさがほ・あみだ・いち  
 ひ・かは・きりぎりす・こぬ・さいぐさ

4-3 整版本

整版本では、清逸本と同様に、界線なしの用箋（片面12行）が用いられており、「あ～そ」部では、2932語（句）の項目が掲げられている。項目数だけ見れば、清逸本の3割程度の分量にまで節略が行われていることが分かる（もちろん、中編や後編へと回されたものが多々あるのであるが）。

整版本の1行には約30字が収められており、1つの項目に対して平均して4.25行の語積が行われている。すなわち、字数で示せば、1項目につき127字程度が用いられる計算となる。単純計算ではあるが、自筆本の約2倍の分量の語積がデフォルトで採用されていたことになる。

また、「あ～そ」部の行数における標準偏差は4.134659となり、次の図表3を得る。

整版本において、自筆本・清逸本と同様に項目数全体の上位1パーセントを長大項目であると規定すると、23行以上、偏差値で示せば95以上の語積を含む以下の22項目を抽出することが出来る。

【53行】きく【46行】こひ【40行】きつね【39行】あふぎ【32行】さる【31行】しほ【29行】かひ・せ【28行】すゞ【27行】かみ・かり【26行】くし・す・すゞり【24行】を・さくら【23行】え・かづみ・かつら・かば

5. 各本に見られる長大項目の特徴

前節で算出した分布及び長大項目に関して、本節ではここにその特徴を考察する。

5-1 自筆本

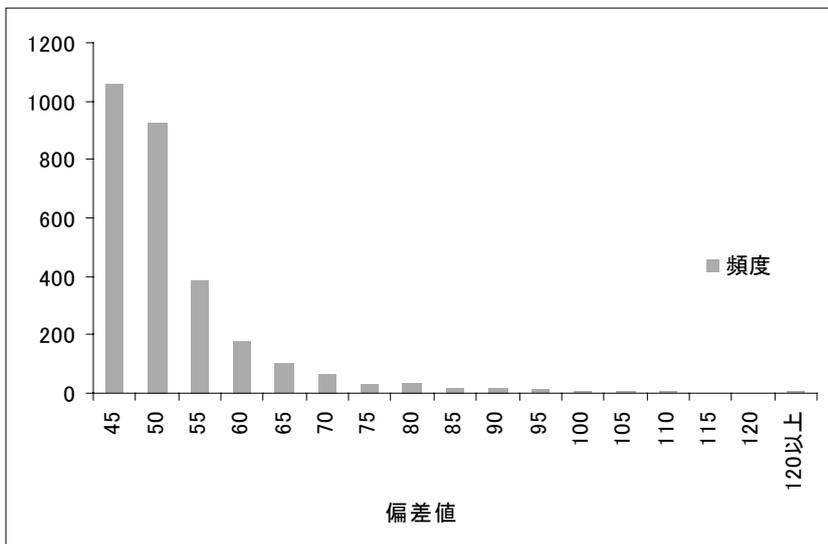
自筆本においてまず注目されるのは、長大項目が今回の調査対象である「あ～そ」部に固まっているという点である。「あ～そ」部までの平均行数は2.93であり、「た～お」部までの平均行数2.71と比べても、そこまで大きな差は出ない。その中で、「あ～そ」部の中に長大項目が多いという事は、想像を逞しくすれば次のようなことを示唆するものと考えられる。すなわち、

倭訓栞の執筆を始める前の準備段階として、広く「あ～わ」行までの語を集めた後に、50音順に排列することを目指したことで、比較的冒頭の項目から、更に多くの用例を増補していったものである。

ということが見えてくるのである。

自筆本の成立過程に関して、三澤（2006）に指摘のあるように自筆本が草稿段階にあることが明白であることを受けて、平井（2010）<sup>7</sup>では「未完成のまま製本したのは、まずは書物としての体裁を整えて、本居宣長なり執筆協力者なりに閲覧してもらい意見を仰ぐためであったか。あるいは、出版を依頼する京や江戸の版元に対する商品見本の為であったのかもしれない。」と述べた。長大項目の偏り具合と照らし合わせれば、自筆本というものは「土清が編纂を初めた草稿類をもとに、とりあえず整形して書籍としてまとめた組見本

【図3】



【表3】

偏差値	頻度	割合 (%)
45	1057	36.0504774898
50	928	31.6507503411
55	389	13.2673942701
60	177	6.036834925
65	99	3.3765347885
70	63	2.1487039563
75	32	1.0914051842
80	34	1.1596180082
85	19	0.6480218281
90	16	0.5457025921
95	9	0.306957708
100	6	0.204638472
105	5	0.17053206
110	5	0.17053206
115	1	0.034106412
120	1	0.034106412
120以上	4	0.136425648

のようなものとして成立したものである」という可能性が考えられるのである。この点については更なる検証が必要であるため、後の調査に俟ちたい。

ここで、自筆本最長の語釈を持つ「そら」の項目を抜き出して考察を加える。改行位置は／で示し、以下同様に扱うこととする。

そら 虚空字をよめり自然の言なる／へし梵語といへるは心得かたし神代木に虚中／といふは未有所方也と釈せり凡そ虚空と／いへる詞は泛く天地の間を指ていへり後世たゞ天／のごと心得るは非ず舊事紀に天御虚空豊／秋津根別と申す神号します又大虚空に／翔行て巡睨て天降りますとも書せり神代／紀に坐於虚天爾生兒と見えたるは天上と／中国との道中を指ていへるなるへし古事記／に天津日高の御子虚空津日高といへるは／天子と太子とをかくあがめていふことし○／心そらなる足もそらにて見るそらなききくそら／なきなといふは落つかぬ事をいふめり新後／拾遺集に／時の間にうつろひやすき花の色は今をさかりと見る空もなし／○そら言そら笑などは虚偽の義なりいひ／そらすなども鷹などのそれるといふに同じ／俗にそらを轉してすらともいふすらみゝ／すらかだなと是なり

この中には、漢字表記・語源・語義・出典・用例(散文・短歌)・多義語と派生語、などの情報がまんべんなく盛り込まれていることが分かる。

「自然の言なる／へし梵語といへるは心得かたし」という箇所は、「日本釈名」における「自語」の概念などを受けてのものと考えられる。自筆本「あめ」の項目に、「自然の言なれば強て義を求へからず」と記されているものと同様である。

また、「泛く天地の間を指ていへり」という語釈も、「そら」というやや抽象的な概念に対して客観的な態度で意味の本質に迫っており、語義説明としては極めて明快なものであると言える。この部分が土清のオリジナルのものであるかどうかは未確認だが、国語辞書の語釈においてこのような視点を重視する姿勢こそ、近代国語辞書へと繋がるものであると筆者は考えている。これまでの調査で、自筆本においては客観的な態度で行われる語義説明が全項目の20数%程度にしか現れない一方で、整版本に至ると6割を超える割合で採用されていることが分かっている(平井2012)。編纂が進むにつれて語義説明に客観性が導入されたこと

と、自筆本の長大項目にこのような語釈が含まれるという事は無関係ではないであろう。

長大項目の上位にある「こころば」の語釈にも、「大嘗会の冠の上に懸るもの也祭主などは賢木の枝をさせり」としていたり、「かはやしる」の項目にも「河の上に柵を立て柵をかきてする也奥義抄にし竹を柵にかきてそれに神供を奉るといへり」といった語釈が付されたりしており、客観性と長大項目の関係を解き明かしていく中で興味深い事例といえる。

「そら」の語釈にある「心そらなる足もそらにて見るそらなききくそらなきなといふは落つかぬ事をいふめり」「そら言そら笑などは虚偽の義なり」の記載もまた、客観性という点で優れた語釈であり、同音異義語を的確に押さえていく姿勢がうかがえるものである。

## 5-2 清逸本

清逸本では、特に「あふぎ」の項目が圧倒的な分量を誇るが目につく。

あふぎ 扇をいふあふぐを体にいへる詞也月にた／とふるも西土にも月扇と見えたり雪にたとふるは班／姫扇の故事也といへり倭漢ともにもとは団扇なり／しいまの扇子は日本より造り出せり通雅に摺扇起／于東裔爾盛于今日といふ是也今舶来の摺扇象／牙を紙に貼せしものあるに至れり遵生八牋に／象牙桃枝扇見えたり通鑑南齊の下胡注に腰／扇今摺疊扇也佩於腰間故曰腰扇といへり○(以下略)

これ以降、30個の「○」記号を用いつつ、歴史上利用されてきた「扇」にはどのような種類があり、どのように使用されてきたのか、といったことが具体的な出典を挙げて記述される。倭訓栞では同音異義を区別する際によく「○」記号を用いるが、この項目のようにひたすら異なる出典からの用例を列挙することも少なくない。「○」記号に託された土清の思いもまた大きな課題である。

整版本が刊行に際して節略されたことに関して本居宣長が遺憾の意を表明している書簡が残されていることから分かるように、倭訓栞の編纂が進んで清逸本の頃になると、字数や制約にとらわれずに自由闊達な語釈の妙を楽しむ書物としての側面を強く持っていたことがうかがえる。すなわち、「あふぎ」の例のように、古典籍を調査すればするほど溢れるような用例が見つ

かり、それらを気ままに収録していったものがある。

その一方で、自筆本とほぼ変化のない「強の字をよめり痛勝の義也」という語釈に留まる「あながち」のような例もある。最低限の語釈を施している項目を観察することで、辞書の構成要件として土清が最低限求めていたものが分かると考えられ、それは漢字表記であろうことが分かるし、これは自筆本から清逸本に至るまで変わらないものであったのだと考えられる。

「あながち」について、自筆本では続けて「あなとは事の切なるにいふ辞也」という語釈が載っていることから、ただ単に清逸本は調査に伴って語釈が膨張しただけの本ではないことも分かるのである。また、三澤薫生氏の一連の研究により、自筆本から清逸本に至る際に削られた項目も知られるところである。

すなわち、清逸本は項目の厳選や語釈の推敲などを行いつつも、土清の趣味や思想信条に従って有る部分では際限ないほど膨張していった書籍である、ということが言えるのである。他の長大項目の分布を見ても、溢れる思いから膨張した項目が多岐にわたることがよく分かる。

### 5-3 整版本

整版本では、突出した長大項目が相当程度減少していることが見て取れる。清逸本で圧倒的であった「あふぎ」についても、整版本で上位4番目の長大項目ではあるものの、その勢いは抑えられていると言えよう。

「あふぎ」の項目を見ると、「○」の数は28であり、その数自体が大きく減少しているわけではない。しかし、「○」から「○」への間隔が長いものが削除されている傾向にあり（新たに短い要素が付加されていることも分かる）、全体として長大ではあるものの個々の「○」の中身はコンパクトですっきりとした印象を与えるものとなっている（それでも既述は3丁に跨り、極めて長い印象を与えるのであるが）。

「あふぎ」は清逸本において偏差値310という圧倒的な行数117を誇ったが、整版本では偏差値134の39行に留まる。清逸本から整版本へと編纂が進む中で、大幅な節略を行うことで、全体的な行数を均そうとする作用のあったことが分かるのである。なお、整版本で最大の行数である53行を費やした「きく」でも、その偏差値は167であり、清逸本における一極集中の膨張度合いに比すれば比較的穏当なものとなっている。清逸本が「書肆の影響を受ける前の国語辞書の在り方」を示す好例である一方、整版本において「編集の都合で

語句・語釈が節略されていった」という様子が改めて確認できる。

また、分布の様子から、整版本では「平均的な行数で淡々と記述するもの」「多少行数を割いて詳しく記述するもの」「より行数を割いて詳述するもの」という段階的な傾向を見ることが出来る。これは、多数の語彙を統一的な基準で納めていく辞書としての体裁を保ちつつ、土清の主観から字数を割いてしかるべき項目にはそれなりの行数をあてがっていった、と考えられる。現代の辞書作りにおいても、語釈の字数にいくつかの段階を設けて、編集側が重要だと判断した項目に関して「この項目はこの字数で」という割り振りが行われることがある。土清が辞書を作成していく中で、膨張した清逸本を節略するにあたり、字数を通した項目ごとの価値判断を行った結果が表れているのではないか。

## 6. 各本における長大項目の比較検討

### 6-1 長大項目の位相比較

各本の長大項目を一部再掲すると、

そら・せ・かはやしる・え・こゝろば・さくさめ・すがる・あなゝひ・あわゆき・かげろひ・き・しをり（自筆本）

あふぎ・きく・さくら・きつね・こひ・うし・うはづみ・かひ・あすか・かも・かづみ・かり・くま・さる・しほ・あやめ・いつきのみや・かはらう・かみ・を・かつら・せ・け・さば・すゞ・あ・の・あらし・こ・いぬ・かき・かりのつかひ・くし・あまつきつね・をの・すゞり・うめ・かば・しのぶ・す・あこぎ・からす・ごいし・ごりやう・え・くも・さけ・あふひ・あめ・うぐひす・えび・かな・かね・あへ・あま・かみなり・き・すまひ・あし・いも・かい・かはつ・かめ・くり（清逸本）

きく・こひ・きつね・あふぎ・さる・しほ・かひ・せ・すゞ・かみ・かり・くし・す・すゞり・を・さくら・え・かづみ・かつら・かば（整版本）

のようになる。

まず目に付くのが、自筆本と清逸本・整版本との語彙の差である。「せ」「え」といった1音節の語に関して、その数を増やしていることが目につく。その上

で、自筆本では「かはやしろ」「ここゝば」「さくさめ」といった神道関係の語や上代文献に見られる語が上位に来ている一方、清逸本及び整版本では、「きく」「さくら」「きつね」「こひ」「かゞみ」といった、時代を超えて汎用性の高い一般名詞の類が上位に来ているということが分かるのである。

ここには、各本の起稿目的が異なる点とのリンクが見受けられる。筆者は、構成や語釈態度からして、自筆本は比較的小規模な単語集のようなものを目指したものであることを指摘してきた。倭訓栞冒頭の総論（清逸本以降では大綱）に「さきに日本書紀通証を著し神道の大旨故実のあらまし事により類にふれて書あらはしぬそれ中にかうかへもらしぬる事かの諸に便りなく及後の世の言の葉など此書に委しくしるし侍る」などと記すように、倭訓栞は土清の原著「日本書紀通証」と関わりの深い本として起稿されたことが知られる。

各本に収められた語彙の品詞や位相を詳細に分析せねばならぬところであるが、見通しを述べると、自筆本はやはり全体として神道関係の語や上代文献に見られる語を重要視して蒐集している書物であると考えられる。そして、編纂が進む過程で、より一般的な辞書としての体裁を重視するようになっていったという変化についても、この比較からも感じることが出来るのである。

## 6-2 共通項目の比較

自筆本・清逸本・整版本において、各本に共通する項目が940語句ある。これらを比較することを考える。まず、自筆本の長大項目の上位が他本でどのような

扱いとなっているのか確認する。(表4)

一見して、自筆本で重要視されていたものが他本ではそのように扱われていないことが分かる。このことは6-1とも関わるが、「長大項目とはなっていないかった」ということよりも、整版本においては「標準的な行数よりも低い扱いに留められた」ものが混在していることに注目すべきであろう（「かげろひ」）。すなわち、倭訓栞の編纂過程において語彙選択の価値基準に変化が生じたことがここでも見て取れるのである。清逸本においても、1音節の語を除けば自筆本とはほとんど連動していないことが分かる。

整版本は、書肆の要請を受けて節略しているため、そこには様々な事情もあったと推察されるが、清逸本においても、自筆本で上位に来るような語に関しては新たに積極的な用例採取を行っていなかった蓋然性が高いと言えよう。

つぎに、清逸本の上位項目を中心として比較結果を確認する。(表5)

自筆本においては、そこまで行数が割かれていたわけではない項目が、清逸本となって長大項目と化していることが分かる。特に、「かゞみ」「かも」「うし」などの一般的な名詞に関しては、積極的に出典調査・増補増強が図られている様子が明白である。整版本においては、清逸本で大切にしていたものを何とか残しつつも、全体として均していこうという意識が感じられるものとなっている。

そして、整版本の上位項目を中心として、比較結果を確認する。(表6)

清逸本において行数の割かれた項目を、整版本でも何とかして保とうとしている様子が見て取れる。ま

【表4】

自筆本上位12項目				自筆本下位12項目			
	自筆	清逸	整版		自筆	清逸	整版
あわゆき	93.8	75.5	66.3	あさい	40.6	42.9	42.1
あなゝひ	93.8	59.2	54.2	あざける	40.6	42.9	44.6
かげろひ	93.8	52.2	49.4	いちぐら	40.6	42.9	42.1
き	93.8	112.7	100.2	いかる	40.6	42.9	44.6
しをり	93.8	68.5	63.9	いらへ	40.6	42.9	44.6
すがる	98.7	70.8	63.9	いるかせ	40.6	42.9	44.6
え	103.5	117.4	95.3	いこよか	40.6	42.9	42.1
こゝろば	103.5	84.8	76	うつむろ	40.6	42.9	44.6
さくさめ	103.5	77.8	68.7	うつばり	40.6	42.9	42.1
かはやしろ	118	70.8	61.5	をせる	40.6	42.9	44.6
せ	122.9	133.7	109.9	くるし	40.6	42.9	44.6
そら	127.7	98.8	80.8	くたら	40.6	42.9	42.1

た、自筆本→整版本への変化は、自筆本→清逸本への変化以上に、汎用性の高い一般的な名詞の増強が図られていることを物語っている。

なお、各本で語積数が少ない項目を比較すると、ここでは各本の違いはあまり見られないことが分かる。ある見出し語（句）に関して、行数を費やすつもりはないけれども集録することは必須である、という態度であろう。この点に関しては、品詞分類などと絡めて改めて考察したい。

## 7. まとめ

本調査を通じて、倭訓栞の編纂が進んでいく中で、全体的に平均的な長さの語積に纏めていきたいという谷川土清の意向が強く感じられた。その一方で、「この語だけは行数を費やしてでも語積に分量を割くべきである」という強い信念のもとに記述された長大項目の存在が目につくのである。<sup>8</sup>

そしてその項目の選択に関しては、自筆本起稿の際に力を入れていた神道関係の言葉や上代文献に出てくる言葉への傾斜を脱して、より一般的で汎用性の高い名詞へと意識が移り変わっていく様子もまた明らかとなった。

【表5】

清逸本上位12項目				清逸本下位12項目			
	自筆	清逸	整版		自筆	清逸	整版
しほ	55.1	143	114.7	あながち	45.5	40.6	42.1
さる	64.8	145.3	117.1	くちをし	45.5	40.6	42.1
かづみ	45.5	147.7	95.3	くぬち	45.5	40.6	42.1
くま	64.8	147.7	78.4	あさい	40.6	42.9	42.1
かり	84.2	147.7	105	あざける	40.6	42.9	44.6
かも	50.3	157	76	いちぐら	40.6	42.9	42.1
かひ	69.6	159.3	109.9	いかる	40.6	42.9	44.6
うし	55.1	166.3	66.3	いらへ	40.6	42.9	44.6
こひ	79.3	184.9	151	いるかせ	40.6	42.9	44.6
さくら	79.3	210.5	97.8	いこよか	40.6	42.9	42.1
きく	74.5	215.2	167.9	うつむろ	40.6	42.9	44.6
あふぎ	69.6	310.7	134	うつぱり	40.6	42.9	42.1

【表6】

整版本上位12項目				整版本下位12項目			
	自筆	清逸	整版		自筆	清逸	整版
くし	50.3	126.7	102.6	あさい	40.6	42.9	42.1
す	69.6	122.1	102.6	いちぐら	40.6	42.9	42.1
かみ	60	138.4	105	いこよか	40.6	42.9	42.1
かり	84.2	147.7	105	うつぱり	40.6	42.9	42.1
すゞ	74.5	131.4	107.4	くたら	40.6	42.9	42.1
かひ	69.6	159.3	109.9	こいまろび	40.6	42.9	42.1
せ	122.9	133.7	109.9	さいつごろ	40.6	42.9	42.1
しほ	55.1	143	114.7	しばし	40.6	42.9	42.1
さる	64.8	145.3	117.1	したふ	40.6	42.9	42.1
あふぎ	69.6	310.7	134	したがふ	40.6	42.9	42.1
こひ	79.3	184.9	151	しりうたげ	40.6	42.9	42.1
きく	74.5	215.2	167.9	せうと	40.6	42.9	42.1

自筆本から清逸本への変化においては、語釈の長短が必ずしも対応していないものの、清逸本から整版本への変化では、語釈の長短がほぼ対応している。これは、①自筆本から整版本へと編纂が進む中で、編纂態度を変化させたという事、そして②整版本を完成させるにあたって節略が求められた際には、清逸本における編纂態度を可能な限り保ちつつ、全体的に行数を均していったという事、をそれぞれ示している。

これはすなわち、倭訓栞が神道や上代文献に関する語彙集のような性格のものから、より一般的な語彙を追求する辞書へと編纂態度を変化させていき、最終的に商品として成形するにあたってさらにその度合いを明確にしていった、というように考えられるのである。

### 謝辞

本研究は JSPS 科研費26770159の助成を受けたものです。

### 註・参考文献

- 1) 沖森卓也編、「図説 日本の辞書」、おうふう、92頁、2008
- 2) 平井吾門、「自筆本『倭訓栞』増補の展開について」、日本語学論集、8号、21-37頁、2012
- 3) なお、インターネット上の辞書である Wikipedia においても「長大な項目名」というカテゴリーが設定されているが、そこでは項目名の長短に焦点をあて、「30字以上を基準とする」といったことが示されている。
- 4) 倭訓栞の自筆本や清逸本については、三澤薫生「谷川士清自筆『倭訓栞』について」（和洋国文研究、41号、36-47頁、2006）や同「河北景楨筆、谷川清逸書写『和訓栞』稿本について（上）」（和洋女子大学紀要人文系編、48号、15-31頁、2008）に詳しい。
- 5) 清逸本の扱いの注意点については、平井吾門「倭訓栞を中心とした近世国語辞書史研究の目指すもの」（弘前大学国語国文学、35号、1-26頁、2014）を参照。
- 6) 0行として計測した空見出しが54項目、漢字表記などを簡潔に記しただけの1行項目が1374項目ある。これらを除いた平均値を計測すると4.88行を得るが、大勢に影響はないものである。
- 7) 平井吾門、「『倭訓栞』研究の課題と展望」、日本語学論集、6号、11-23頁、2010
- 8) なお、自筆本と比べて、清逸本や整版本では長大項目のモーラ数が明らかに減っていることから、神道や上代文献といった特殊な状況下で用いられる名詞から、広く一般的に用いられる名詞へと意識がシフトしていることが分かる。例えば「かみ」のようなモーラ数の少ない一般的な名詞では、同音異義語の類が増大するほか、用例も多岐にわたることが容易に想像される。谷川士清が後半生のライフワークとして用例採集を続ける中で、単純な語に関する手控えが膨張していった時、それが行数に反映されたとしても不思議はない。

その一方で、汎用性の高くない「かはやしる」のような項目は、自筆本においては長大項目として重用されていたものの（偏差値118.0）、清逸本では「長大」度合は緩和されていき（同70.8）、整版本に至るとほぼ標準的な範囲に収まっている（同61.4）。

(2014. 8. 4 受理)